

新装版

雲水日記

絵で見る禅の修行生活



禅文化研究所

目次

入門編

初行脚	2
掛錫	4
庭詰	6
投宿	8
巨過	10
日過詰	12
知客	14
参堂	16
安単	18
相見	20

日課抄

開板	24
規矩	26
開静	28
出頭	30
朝課	32
堂内調經	34
常住調經	36
典座	38
飯台看	40
粥座	42
茶礼	44
独参	46
日天掃除	48
集米	50
托鉢	52
小憩	54

貼案	副隨	三戒	副司	開枕	守夜	昏鐘	晚課掃除	晚課	点心	行道	祝聖	開浴	大四九	剃髮	園頭	作務	齋座	歸院
てんあん	ふずい	さんのかう	ふうす	かいちん	しゅや	こんしやう	ばんかそうじ	ばんか	てんじん	ぎやうどう	しゆくしん	かいよく	おおしく	ていはつ	えんじゆ	さむ	さいざ	きいん
92	90	88	86	84	82	80	78	76	74	72	70	68	66	64	62	60	58	56
夜坐	工夫	提唱	法鼓	經行	仏心行	入室	喚鐘	警策	止静	坐禅	接心	開講	告報	龜鑑	総茶礼	茶礼出頭	把針灸治	參禪錄
やざ	くふう	ていしやう	ほつこ	きんひん	ぶつしんぎやう	にうしつ	かんしやう	けいさく	しじやう	ざぜん	せうしん	かいこう	こくほう	きかん	そうざれい	さわいしゆつとう	はしんきやうじ	
130	128	126	124	122	120	118	116	114	112	110	108	106	104	102	100	98	96	

總參

132

檢單

134

延壽堂

136

陰事行

138

見性

140

歲時記

除策

144

加担

146

半齋

148

更衣

150

半夏

152

饗応

154

起單留錫

156

解制

158

二夜三日

160

柵經

162

施餓鬼

164

彼岸鉢

166

休息

168

弁事

170

款接

172

加役

174

大根鉢

176

漬物

178

臘八 ろうはつ
冬夜 とうや
正月支度 しょうがつじたく
大般若 だいばんにゃ
随意坐 ずいざ
交代支度 こうたいじたく
交代 こうたい
暫暇 ざんか
賓接 ひんせつ
放行 ほうぎょう

198 196 194 192 190 188 186 184 182 180

臨濟禪における
公案禪の特色
道前 慈明
用語解説
207 201

入門編

初行脚 はつあんぎや

志を立てて郷関を出る

今春、学窓を巣立って、僧堂修行の大決意を固めた仏心寺の弟子、養肝ようかんという好青年の体験を主題として、禅堂生活の実際を紹介することにする。

一人前の禅僧になろうとする禅寺の小僧は、僧堂の修行という実習過程を絶対無視するわけにいかぬ。自らの実参じつさん実究じつきゅうなくして禅の根源的体得はありえない。体験の伴わぬ口耳の学で真に自分や人が救えるとは思えぬ。されば宗門の掟は、大学卒といえどもこの課程を経ぬかぎり住職資格も認めない。彼は禅に生きて、人々の生活を幸福なものに設計指導する仏弟子の使命を痛感、まず、宗旨の蘊奥うんのうを究めることにした。

四月のある朝、師匠の万端の指図で古来からの雲水独特の旅装をととのえた。紺木綿こんもめんの衣しろきやはんに白脚絆ずだぶくろ、首に頭陀ずだぶくろ袋ずだぶくろ（雑囊ざつのう）、太紐ふとひもで振り分けにした袈裟文庫けさぶんこ（内に麻袈裟、日用品、外に持鉢じはつ、経本、剃髮用具をくくりつける）を前側に、雨合羽あじろ・白衣はくえの風呂敷包を後づけにしてひっかつぎ、網代あじろ笠がさを携えて、一同に見送られつつ落花の郷里を出発した。まさに決意に燃えた新人生の門出。

行
脚



掛錫かしゃく

道場入り

昨夜は洛中の知己のお寺にご厄介になり、早朝に辞して僧堂所在の本山境内に足を踏み入れた。落ち葉ひとつ留めぬ通路をはき馴れぬ草鞋わらしで踏みしめて行き、やがて敵の牙城に迫る緊張感を覚えつつ、大看板のぶらさがった僧堂の門前に立つ。

今、入門しようとする僧堂は専門道場の名でも知られ、臨済宗各本山、他の名刹など全国に四十ヶ所近くあつて、師家しけと呼ばれる嗣法しほほうの道場主が一団の雲水うんすい（修行僧）たちを指導し、一箇半箇いっごはんこを打出たしゅつする、いかなれば禪の本場ぜんだ。そして、いずこの道場も「禪の大道は無門なり」と何びとにもその門戸を開放しているが、さて、この門を入ろうとする者は猛烈な求道心ぐどうしんという鍵を要求され、大疑団だいぎだん、大憤志だいふんし、大信根だいしんこんの具備が入門資格として試される。

予め教えられては来たものの、これから浮世離れた昔からの方法で入門テストを受けねばならぬと思うとき、さすがに二の足を踏む思いである。



掛錫

德門南樓

德門南樓

もはや躊躇はならぬ。最初の関門に挑む。薄暗い玄関の低い式台へ旅装のまままで低頭し、無我夢中で「タノミマシヨ」とどなってみる。と、寂寞のどこからか「ドーレ」と重々しい応答。まもなく現われた一雲水に住所姓名を告げ、願書、履歴書、誓約書を入れた封筒を差し出して掛搭を頼みこむ。取りつきはいったん奥へ伺いに消えたが再び現われ、「当道場はただいま満員でゆとりがない故お引き取りください」と断わると、すげなく奥へ入ってしまった。それかぎり。さあ、これからがたいへんだ。

「たとえ玄関払いを喰らつても用便以外は動ぜず坐りこめ。かりに他の道場へ廻ったところで、同じ口上で追っ払われるだけだぞ」とさんざん忠告されてきた。予定の行動に移らねばならぬ。時に八時過ぎか。長い身体を二つに曲げて低頭を始めたが、はやくも腰は痛み出し、額をのせた手の指は感覚を失って始末がわるい。古来、先輩たちのことごとくが堪えて突破してきた関門だと合点しながら頑張るが、なるほど、聞きしにまさる苦行だ。

庭詰

照顧脚下



投宿とうしゆく

宿泊

やつと三時すぎと思われころ、

「投宿とうしゆくを許すから上がりなさい」

という頭上の声。どうやら野宿だけは免れたようだ。草鞋わらじを脱いで運ばれたバケツの水で足をすすぎ、玄関わきの四畳半ほどの小部屋に上がりこみ、袈裟けさぶんこ文庫を柱に立てかけて対面して落ちつくと、まったくホツとした蘇生の思い。

まだ早い時刻なのに薬石やくせき(夕食)の合図が鳴る。大勢の雲水の末席に並んで、見よう見まねの作法でどうにか雑炊をいただく。夕暮れになると、薄暗い裸電灯が点ぜられた。夜のおとずれとともに刺激的な一日の体験が走馬灯のようにめぐる。終日の低頭懇願でからだ中痛んで顔も足も腫れぼったい。

「どこの馬の骨ともわからぬ奴が、玄関辺でウロチヨロせず、トットと出てゆけ！」

襟首を捕えられて門前へ引きずり出されながら浴びせられた罵詈ばりさんぼう。二回三回とそのたび恥かたじけずかしさに胆きんを冷やしながらかも舞い戻っては続けた低頭。覚悟の上とはいふものの身も心もくたくたに疲れたようだ。

投
宿

